PC 利用の授業の紹介（英語 e ラーニング）

異文化コミュニケーション学部（全カリ英語教育研究室）教授
川﨑晶子

1. はじめに

Week 1：システムが複雑で不安です。(PC 苦手だったらどんどんアシスタントにやり方聞いて下さい。遠慮なく！)
Week 4：テストが全くできませんでした。アポストロフィーのだし方がわからなくて、タイピング時にいつもとまってしまいます。（その場でアシスタントに聞きましょう。タイピングを覚える良いチャンス。）
（中略）
Final Comment：機械が苦手なので初めは不安でしたがなんとかやっていくことができました。スーパースタンダードコースのおかげで元々得意だったリスニングはより伸ばす事ができたと思います。長文を読むのはまだあまりうまくいきませんが、単語力はそれほど落ちずにすみました。使わないどんどん忘れていくので、これからも意識して無理なく英語にふれていきたいと思います。

パソコンで英語を学ぶので目が疲れてきたり、途中でテストをやめられなくてちょっとストレスに感じる事もあったけど、ゲーム感覚で英語が学べてたのしかったです。TOEIC の演習テストとかうけると、自分の英語力がわかるので、今後も活用していこうと思いました。コンテンツがたくさんあるので楽しいです。まだまだリスニングもリーディングも上達する伸びしろがたくさんあると感じたので、これからも英語がんばります。

これは、2015 年度秋学期の私の e ラーニングのクラスの学生が Self-Evaluation Form(SEF)に書いた授業の感想である。1 つ目は一人の学生の第 1 週と第 4 週、そして最終コメントである。私が欄外に書いたコメントも括弧をつけ加えてある。第 4 週目、授業が始まり 1 ヶ月たってこの質問かとびっくりしたが、その後「アポストロフィーの出し方がわかりました！」との報告、そして 3 センチほどの幅のコメント欄に「英文の中で一度単語の意味を勘違いするとその後も読んでいる間ずっと混乱してしまう」など、詳細な記録を書くようになっていった。最終コメントでは、自己分析し、気負わず継続したいという希望を書いている。2 つ目は、別の学生の最終コメントだが、「上達する伸びしろがたくさんあると感じた」というところが印象的である。

SEF は裏表に 14 回分の授業記録の記入欄がある A4 の紙で、毎回配布・回収する。この 1 枚の紙はすべての e ラーニングの授業で使われており、「大人数を相手に機械を通しての授業」という e ラーニングの堅いイメージを払拭し、担当者と学生が 1 対 1 でつながっているような感覚を生みだす必須のアイテムである。

14 週間の授業で出来る事には限りがある。上記の学生のように、これからの可能性を自分でも期待しているような感想がいくつもあり、そのような形で授業を終わることができた事を担当者としてはうれしく感じる。実際は自主的な継続学習は自己管理がしっかりできないと難しい。副専攻(2 年生以上の自由選択科目)をすすめるなど、担当者としては最後までおせっかいな情報を与え続けることになるが、ともかくやり方がわかってきたこれからも頑張ろうという気持ちになっている

学生達を応援する気持ちでいっぱいになる。

2. e ラーニングの目的と様々な学習方法

英語 e ラーニングは「リーディング力とリスニング力を中心に英語力の基本となるスキルを伸ばし、また、ウェブ教材を活用できる自律的な学習者になることを目標とする。」とシラバスにあるように、基礎力をつけるところである。しかし大学に入ってくる学生の英語力は、すでに皆それぞれに異なり、基礎力をつけるといっても必要な事はバラバラである。私の初回授業では「自分の英語力を知り、弱いところを強化し強いところを伸ばし、そして、自分で英語力を維持し伸ばしていく方法を探す」ということを具体的な目的としてかかげ授業を始めている。

授業を初めてしばらくたつと、「受験が終わったら英語を忘れた」、「英語力が下がった」、などのぼやきとともに、「単語を増やしたい」、「もっとちゃんと聞けるようになりたい」、「TOEIC の点をあげたい」、というような記述が SEF に増える。得点をあげるなどの目に見えやすい目標を達成するノウハウを知ろうとしている段階である。そういうぼやきには、「英語に接していなければ忘れる」、「単語だけ覚えても忘れる」、「自分で使える様に文脈とともに覚えていき、他のクラスでも使う事で、本当の実力になる」、「たくさん聞くと慣れてくる」、「TOEIC の点は 1 つの物差しにすぎない」、「コツコツと続けていれば必ず上達している」、そして、「楽しいことは続く、自分が楽しみながら続けられる方法をさがしてみよう」などのコメントを返している。その様な事の積み重ねで、自分の得手不得手を知ることの大切さ、自分に向いている学習法を見つけると積極的に続けられる、などのことを実感していき、自律した学習者に近づいていく。

90 分の授業時間の前半 2/3 は、指定ウェブ教材、NetAcademy2(NA2)の学習である。宿題を出し、宿題確認テストで授業をはじめ、各自で指定ユニットの学習をし、それが終わったら自分の選んだ部分の学習をしてもらう。教材には詳細な解説があり、単語がわからなければ説明を読み、文章の意味がとれなければ訳を読んでみる、聴き方や読み方を様々な方法で練習する、等々、すべて学習者が必要に応じて教材の内容を利用しながら学習できるようになっている。ウェブ教材は、インターネットが使えれば、いつでもどこでも学習できるという大きな特徴があり、また、学生が何時何分に何をしたか、受けたテストの結果などが詳細に記録されるので、授業時間以外での学習も管理しながら宿題等を課せる。NA2 では、コツコツやることの大切さ、やり終えた充実感などを味わいながら、それぞれの学生に必要なやりかたで英語力をつける努力をしてもらっている。

ウェブ教材というものは、使ってみると本とノートではできなかった学習方法があることに気づく。NA2 や REO[i]の中で、多くの学生が気に入っている学習法やパソコンだからできる学習法を少し紹介する。

(1). ディクテーション

NetAcademy2 のアドバンストモードのディクテーションは、リスニングをした英語を、犬に追いつかれて噛みつかれないようにスピードを上げて入力していく、ゲームの様な書き取り練習である。REO にも、「週刊！英語ドリル」という基本構文と基本フレーズのディクテーションがあり、適度な長さでやりやすい。入力を間違えればブー、あっていればピンポーンと、ゲーム感覚で楽しみながら聞こえたものを入力していく。毎週問題が変わり、選ばれている文・発話が非常に汎用性が高いもので、ディクテーションと同時に覚えておく。どちらも、ゲーム感覚ですすみ、かなりはまる学生が多い。実は、ディクテーションは総合的な英語力養成

になる。まずはスペリングで、間違えることでｒとｌの違い、ｓとｃの違いなどに気付き正しいスペリングを覚えるきっかけになる。「語尾のｓをぬかした」「ed が聞こえなかった」などのぼやきが SEF にあると、「実際ははっきりきこえていない事が多い。それより、文法力、作文力で補って正しく入力しないと」とコメントする。つまり、聞き取って書くということは、実は正しい文の再生をすることであり、小さな間違えでも容赦しないパソコン相手では、完全に正しい文を入力することが要求されるため、よい練習になるのである。そして、正しい文の入力に慣れてくると、文頭が大文字でないとおかしい、と逆に正しくない文に反応する様になる。正しい文章を書く習慣がついたことになり、そこまでいけばしめたものである。

(2). チャンクポーズ、チャンク読み

リスニングでもリーディングでも意味の塊、チャンクで、聞いたり、読んだりすることを選べる。チャンクポーズやチャンク読みに設定すると、画面上にチャンクごとに文字が現れるので、それを繰り返しているうちにチャンクの感覚がつき、チャンクで意味をとる習慣もつく。本で、線を引くなどしてチャンク読みをやるのに比べて、強制的にチャンクで聞いたり読んだりすることになるので、練習になる。ただし、チャンクが大きすぎもう少し小さいチャンクでと思っても、すでに入力されているチャンクしかないので、融通が利かない。パソコン学習の利点欠点の両方を感じる学習方法である。

(3). ＷＰＭ

Word Per Minute、1 分間に何語読めるか、という数字である。リーディングでは、まず自分の WPM が計れる。読み始めに start ボタンを押し、読み終わったときに finish ボタンを押すと、その時の読んだ速さが WPM で表示される。また、チャンク読み、センテンス読みなど、様々な読みを体験するステップでは、表示を 120WPM、160WPM、200WPM のどれかに指定して、そのスピードでセンテンスやチャンクを自動表示しながら読むことができる。パソコンならではの読みの練習である。

後半の 1/3 は、「自学自習のすすめ」というコーナーにし、様々な英語学習や英語との接し方を紹介している。全学で使える Rikkyo English Online(REO リオ)の活用の仕方、TOEIC/TOEFL などの外部試験の目的や特徴の説明、英語の実際の発音の省略や合併減少を学ぶサイト、文法問題を直感で解き自分の苦手な部分を見つけ学習すべき項目を見つける文法テストサイト、世界を知るサイト（料理、旅行、世界遺産、等)、日本を紹介するサイト（折り紙、和食、旅行、等)、YouTube や英語 DVD の英語学習例（邦画を英語字幕で見る例、映画などから社会・文化を知る例)、等である。また上級の学生には、TED（Technology Entertainment Design）の動画で、様々な分野のプレゼンテーションを見ることなどもすすめている。自学自習のすすめのコーナーでは、特定の目的に特化した学習サイトや、逆に学習を目的に作られたものではなくても、さまざまな英語との接触で自分の英語力を伸ばしていけることを提示し体験してもらっており、学生達もその中のいくつかは自分もやってみようと思うものがあるようである。SEF での反応も、自学自習のすすめに関する事は多い。

3. PC 利用の授業の始まりから現在まで

2006 年に、R&L PC[ii]という、英語 e ラーニングの前身のクラスが始まった。1997 年から始まった全学共通カリキュラムの英語では「発信型」と「異文化対応」を大きな目的として掲げ、自作のテキストと統一シラバスのもと、ユニークな授業を展開していた。しかし、毎学期末の学生による全カリ英語必修カリキュラムアンケートから「授業には満足しているが、英語力が上がったとは実感していない」ということもわかっていた。英語力がつき、かつついたと感じることができるクラスをということで、インターネットのウェブ教材を利用しての R&L PC が計画された。まず、学生が使えなければはじまらない。パソコンが家庭にかなり普及し始め、インターネットも使える環境になりつつあった時代である。2005 年前期の授業評価アンケートにインターネット環境の質問を加えたところ、学生の約 8 割が自宅からインターネットを利用できることがわかった。学内にもパソコンで学習できる場所が必要である。そもそもウェブ教材を使って教えられる教室がなければいけない。教える側の人数も限られる。英語カリキュラムの理念と物理的な制約を擦り合わせた結果、1 年生を前期と後期に分け、機器で連結された CALL 教室での合併授業で大人数クラスにし実施することになった。合併できる CALL 教室が必要。5 教室を合併して行う授業というのも初めて。具体的に考えると、機械で画像や音声を流せるようになっても、先生は一人、親教室先生がいるとして、他の子教室にも先生に代わる人が必要となる。当時はまだ、TA や SA の概念もはっきりしていない時代で、補助役をどのような形でどのような人に頼めるかをゼロから考える事から始まったと聞く。当時の一ノ瀬和夫英語教育研究室主任とメディアセンターの宮内文隆さんが知恵を絞りながら相談。そして、最終的には、メディアセンターの英断で、教室で機器の使い方や授業運営の補助をするために、メディアセンターがアシスタントを探し、雇い、教室に配置するという形をとることになった。現在もメディアセンターの SA (MSA) は存在し、親教室から子教室への配信の確認、学生の機器操作トラブルの対応、SEF の配布回収などをやっていただいている。実は、英語 e ラーニングはメディアセンターがなければ始まらなかった授業で、また今もメディアセンターの協力なしには成り立たない授業なのである。

開始当時と現在とでは、様々な点で格段の差がある。現在の教材は、学生の学習意欲を高めるようなポイント制や単語学習が終ると色が変わっていき全部終ると絵になる単語学習サイトなど、ゲーム的要素がさまざまに取り入れられている。リーディングやリスニングも、すでに紹介したように、ウェブ教材だからこそ出来る機能が盛り込まれている。担当者の負担もかなり減った。分担して Quiz を作り、それぞれが手入力していたのに対し、現在は、穴埋め問題に限られるが自動問題作成ソフトがついており、宿題にしたところを担当者が簡単に小テストを作り実施、結果の記録や分析もまとめて行えるようになった。統一シラバスの周知の仕方も大きく違う。2006 年の最初の PC の授業を担当した記憶があるが、その時は、資料一式を英語教育研究室室員の高橋里美先生が CD にまとめて配ってくださった。現在は TeachNet という全カリ英語教育研究室作成の全カリ英語担当者用ウェブサイトですべて管理するようになり、e ラーニングも、統一シラバス、担当者が知っておくべき細かい事、教え方のコツまで書いてある『英語 e ラーニング担当者ハンドブック』を作成、毎年改訂し載せている。ハンドブックのおかげで、初めての担当でも初回授業のやり方などの詳細な記述通りにすれば、ともかく授業を始めることができる。TeachNet には、その他、名簿を貼り付ければ自動入力のできる座席表などこれまでの授業で使われた便利なものも多々載っており、活用されている。

格段の差があるなかでも変わらない部分がある。全カリ英語のカリキュラムの中での e ラーニン

グのあり方に対する検討と、そこから作り出した統一シラバスの基本ルールの周知、そして、実際に担当した先生方の工夫したやりかたは共有しようという分かち合いの精神である。自分の考えたやり方などを提供し、利用し合うシステムになっている。このノウハウの共有の原則は引き継がれ、英語プログラムの質の保持と向上に貢献していると思う。

4. 英語 e ラーニング　概観

最後に、英語 e ラーニングを概観し、今後を考えたいと思う。

新入生は約 4600 人、その全員が必修として前期か後期の e ラーニングを履修する。学生の見方をすると、英語は週 3 回、前期後期ともにある Discussion (D)と Presentation (P)に加えて、どちらかの学期で e-Learning (E)か Writing (W)を履修することになる (2016 年度からは、通年科目は D と Reading & Writing (R&W)に、半期科目は E と P に変更)。小さなクラスで 80 人程度、大きなクラスでは 200 人程度がひとまとまりで授業を受ける。現在、前期 16 クラス、後期 16 クラスが開講されており、専任と教育講師が担当している。担当する側からすると、8 人クラス、20 人クラスと少人数クラスが中心の英語の授業の中で、ともかく特殊な大人数クラスである。すべてメディアセンター管理の教室で、200 人収容の大きな教室 1 つでやる場合と、45 人程度の並んだ教室を機器でつないで 1 つの教室とみなしてやる場合とがあり、担当者 1 人につき、全カリの TA/SA 1 人と、学生約 40 人に対して 1 人の、メディアセンターの SA が授業補助をおこなう。

全カリ英語科目のカリキュラムの枠組みの中で、D、P、W は持てる英語力を駆使して発信していこうという発信型の授業、読んで考え、聞いて意見交換し、と英語を積極的に使おうという応用型の授業であるのに対して、E は基礎力の獲得と自律的な学習者になることを目的にしている。ウェブ上に様々なレベルの多様な学習法を含む教材をたっぷり用意し、個々の学生のニーズに合わせて個別学習をする。授業では、学習習慣形成のために一定量の学習を指示し、また個々の学生が自分にあった継続できる学習方法を探す手助けをする。もう一つ、他の英語の授業と異なることに、授業中の日本語使用がある。D、P、W(R&W)はすべて英語でおこなうのに対し、E は日本語で指導する。機器やソフトの使い方の説明などは、日本語で簡潔に行う方が効率がよい。

主教材は、アルク社の NetAcademy2 (NA2)の Super Standard Course と TOEIC 演習 2000 Course である。それを授業でも、宿題でも、自習でも使える様にしてあり、学生は授業中の他、文字通りいつでもどこでも、インターネット環境のあるところでは学習可能である。卒業まで使える。授業では、主教材に加えて、担当者がその他の学習方法の紹介や 90 分のパソコン相手の疲れを取るようなもの等を交え、90 分にメリハリが付くように教材を準備し、授業も、一斉に同じ事をやる時間と、個人個人別なことをやる時間を組み合わせてすすめている。その他にも、同じようなインターネット教材で導入した Rikkyo English Online (REO)を一部利用しているクラスもある。REO は NA2 ほど細かい学習機能や履歴保存機能は無いが、話題が豊富でレベルも易しいものから難しいものまであり、学生でも教職員でも、V-Campus ID を持っていれば、だれでもいつでもどこでも使える教材である。

5. おわりに

私の授業では、自己認識、自己管理、自分にあった継続学習の発見、英語学習の楽しみを見つけるところにしたいと思いながらやっている。そのためには、自分の授業内容の工夫も大事だが、それ以上に十分なウェブ教材とウェブ環境、パワフルな機器、運用の際の協力体制があってはじめて

可能になっている授業だと痛感している。長期の休みが入ればすぐ忘れてしまう細かな機器操作、何度同じ事を聞いても文句言わずに説明してくれるメディアのスタッフの存在や、教室にいてさまざまな学生の機器操作トラブルを対処してくれる MSA 無しには、成立しない授業である。メディアセンター報に e ラーニングの事を書く機会を得て、そのことを改めて感じ、感謝の思いを強くしている。

最後に学生のコメントをもう少し紹介し、終わりたいと思う。

大学に入学してから知識をインプットする機会が減って、自ら勉強しなければどんどん英語力は落ちて行ってしまうなぁ...と思っていたところに、e ラーニングの授業はよい機会を与えてくれました。e ランのおかげで毎日英語に触れる事ができ、受験生の時の語い力が戻ってきたように思います。来年は英語圏に留学したいと思っているので、引き続き自主的に勉強していきたいと思います。

正直、リーディングについては、あまり成長できなかったと感じています。私は、書いて体を使っての方が英単語や熟語を覚えられるので、紙に書く勉強の方がむいているのかなと思いました。でも、その成果の腕試しには、とてもいい教材だったと思います。リスニングについては、言うことなし、文句なしの最高の教材でした。いつも授業の最後にやるコーナーおもしろかったです。

インターネットの環境があればいつでも TOEIC 演習ができるというのはとても便利で、TOEIC の問題集などをわざわざ持ち歩かなくてもよいので素晴らしいと思った。４月に初めて受けたときは、形式も初めてで集中力も続かなかったが、秋学期に毎週この時間がある事で、自分をむりにでも勉強に向かわせる事が出来、結果 TOEIC のスコアのみならず、他の部分の英語力を向上させる事が出来たので、良かった。まだやっていないユニット・機能が多くあるので、卒業までにやって、社会に出て役に立つ英語力をつけたいと思った。(注：4 月に受けたというのは、TOEIC IPT での英語プレイスメントテスト。)

---

[i] Rikkyo English Online （REO、リオ）立教の全学生、全教職員が V-Campus 経由で利用できる英語学習ウェブ教材。

[ii] R&L PC については、2007 年 12 月の全カリのシンポジウムで川﨑が発表、その記録は、全学共通カリキュラム運営センター、2008、「e ラーニングと全カリ：その可能性を考える」、『大学教育研究フォーラム　第 13 巻』　pp. 39-65. に詳しい。